

こもれび

第 51 号

初心忘るべからず…という言葉があります。本機関紙「こもれび」は、平成7年9月に創刊されました。開設後3年半を迎えるふれあいの森は、静かな自然の中で、木々に囲まれ「こもれび」の中に建っていることで「こもれび」と命名したそうです。ご入居者様の生活ぶりやケアの在り方等をご家族様や地域の皆様にお届けし、さまざまつながりを願って発刊も50回を越えました。

福祉の世界では、受容（その人をあるがまま受け入れる）と共感（相手の立場を思いやり感情を分かち合う）、そして相手を理解する（=同情ではない）という専門性に裏付けられた技法があります。

下記、ユマニチュードのアプローチは、麗寿会が開設以降大切にしているご利用者様の自己決定権を尊重し、自分らしくお過ごしになる環境を整えるコミュニケーション手法です。変化の激しい時代だからこそ、引き続き「ご利用者様主体」のサービスを忘れることなく、提供して参ります。

理事長 大屋敷 幸志

理事長からのメッセージ

● ユマニチュードのケア技法とその実践

皆様は、『ユマニチュード』というケア技法をご存じでしょうか？

フランス生まれのユマニチュードは、「優しさを伝えるケア技術」として、ケアを受ける人とケアをする人との間の良好な関係づくりを重視します。良好な関係をつくるためにコミュニケーションの要素として「見る」「話す」「触れる」「立つ」の4要素を定め、「4つの柱」と呼んでいます。また、ケア場面として、出会いからケアを実施し、その場を離れるまでの一連の時間をどうすべきかを「5つのステップ」として定め、「出会いの準備」、「ケアの準備」、「知覚の連結」、「感情の固定」、「再会の約束」と呼びます。この4つの柱の要素を複合的に実践し、5つのステップを経過、継続していくことで優しさを伝えていくケアとなります。

現在、当法人はこのユマニチュードに基づくケアの実践に取り組んでおり、日本ユマニチュード学会に入会し、公式研修の受講や法人内研修会の開催等にて、その理解と学びを深めております。

この度、令和5年9月23日当法人の取組みを発表すべく日本ユマニチュード学会総会に参加してきました。会場の富山県立大学には、全国の病院や施設を中心に多くの参加者が集まり、ユマニチュードの実践について教育・医療・福祉・地域等、様々な報告が行われておりました。基調講演では、ユマニチュードの創設者の一人であるイヴ・ジネスト氏の講演があり、ユマニチュードの哲学や可能性についての説明を熱心に聞き入る参加者たちの姿が印象的でした。私自身も新たな気付きや学びが深まり、より具体的に実践したいと思いました。肝心の実践発表においては、法人全体の認知症ケア推進委員会の取組みと自施設における事例検討報告として『ユマニチュードに基づくケアの効果』について報告・説明をしてきました。他の施設・病院の発表からは、実践内容やその工夫からの学びも多く、今後につながる学会参加となりました。

引き続き、ケア技法・技術としての専門性を高めると共に職員全体への普及と定着に取り組んでいきたいと思っております。



1 理事長からのメッセージ	1 ユマニチュードのケア技法とその実践
2 ふれあいの麗寿	2 ふれあいの泉
3 ふれあいの森	3 ふれあいの里
4 ふれあいの家みのり	4 元町ケアセンター
5 鶴嶺西地区地域包括支援センターみどり	5 茅ヶ崎地区地域包括支援センターゆず
6 小出地区地域包括支援センターわかば	6 鎌倉市大船地区地域包括支援センターふれあいの泉
7 令和4年度経営状況の報告	8 元町ケアセンター
	8 編集後記

● ふれあいの麗寿

2020年1月にはじまった新型コロナウイルス感染症。誰にとっても長く苦しい3年間がありました。当施設は、ご入居者の住まいとして、生活の場として、多くのご家族やボランティアの皆様の出入りがあり、沢山の交流が当たり前の毎日でした。然しながら、その日々が、突然にも、そしてこんなにも長く奪われるとは、誰もが思っていませんでした。外部との接触が制限され、ご家族にもお会い頂けない日々。オンライン面会での画面を通じてのやり取りを見守りながら、家族と毎日会うことができている職員にとっては、苦しく悩ましい毎日でした。それでも、ウイルスの侵入は防ぎきれず、クラスター感染発生時には、ご入居者に更なる生活制限をお願いするしかなく、申し訳なさを感じながら必死に感染拡大防止に職員たちは努めておりました。ただ、このコロナ禍の中でも、季節行事を中心に施設内ではイベントやレクを実施してまいりました。

今年に入り、ご家族との面会もようやく再開でき、今現在ではこれまでの日常を取り戻そうと、地域との関わりも少しずつ再開しております。ご入居者の多くは安定した日常と多少の刺激を求めていらっしゃいますので、先ずは健康管理をしっかりと支援させて頂いた上で、多くのご入居者に喜ばれ、楽しめるイベントやレクを開催しています。これからも笑顔溢れる施設を目指し、職員一人一人が笑顔で活躍ていきたいと思います。



● ふれあいの泉

今年で16年目を迎え、更に地域に根差した施設で有りたいと取り組んでいます。施設車両を住民の足にと始めた「地域貢献送迎買い物支援バス」も5年目を迎え地域に定着しています。鎌倉市こどもみらい部が行っている「放課後かまくらっ子いまいづみ」の子供たちとの地域交流も計画して12月から行っていく予定です。

8月には、4年ぶりに開催された地元自治会の盆踊り大会に出店し焼きそばを販売し、ご利用者も参加をしました。施設の庭での花火大会や、白山神社のお神輿が来た際には共に暑い夏を満喫することができました。又、敬老会にはプロのバイオリニストによるコンサートと併せて職員によるレクリエーションも行いました。

そして、昨年度中施設内全ベッドには「眠りスキャン」を導入し、睡眠や覚醒状態の把握及び心拍数・呼吸数をパソコン画面で確認出来るようになり、科学的根拠に基づく介護、個別性を重視したケアにも取り組んでいます。



ふれあいの森

ふれあいの森は平成4年2月開設より、間もなく32年を迎えます。地域への貢献、施設として、社会福祉法人としての在り方を考え、ここまで歩んで参りましたが、抗えない大きな問題を抱えております。そう、建物の老朽化です。外壁にはひび割れが起き、雨漏り並びに壁紙は反り返るよう剝がれています。そこで今年度のテーマは「大改革」、過去最大の大規模なリニューアルを実施しております。ご近所の方、ふれあいの森をご利用いただいております皆様の中にはご存じの方も多いと思いますが、夏季期間中に外壁の工事を行い、見事なことに外見は新設同様に生まれ変わりました。この勢いにあやかり、特養入所者の皆様が暮らす居室、共同スペースの壁紙の貼り換えも10月に行い、リノベーション物件ならぬ、リノベーション介護施設となりました。

ケアの概念にも大きな変革が目まぐるしく起きている現代、変わなくてはいけないは何も建物だけではありません。ふれあいの森で働くスタッフをはじめ、地域に暮らす皆様も含め、日に新たであり続けながら、日本の高齢化社会に向き合って参りましょう。



ふれあいの里

コロナ禍で季節ごとの外出も自粛を重ねてまいりましたが、本年は少しずつ楽しみを見つけに、季節の花々や創作の機会を求めて戸外活動を再開しております。

4月は相模川河川敷（相模原市新戸）の芝桜ラインへ一足遅い桜（芝桜）を見物に行って参りました。“生憎の強風にも負けず”お花と準備中であった「相模の大凧（八間凧）」の準備風景も見る事が出来ました。

5月は花菜ガーデン（平塚市）に満開のバラを2グループが堪能。

6月には相模原北公園に200種類10000本と言われる紫陽花を見に行きました。中でも一面に咲く真っ白なアナベルは圧巻でした。

8月は、“夏といえば…”のひまわりを求めて、座間市の“ひまわり祭り会場”を訪れ、夏らしい陽気の中55万本のひまわりを満喫。

また、変わりどころとしては4月と6月に、箱根駅伝の中継所としても知られる小田原のかまぼこ博物館にて“ちくわ作り体験”に参加してきました。職人さんからのレクチャーのあと、参加者が思い思いの“創作ちくわ”をその場で焼き上げ、アツアツのちくわを頂き作る楽しみ・食べる楽しみを存分に味わってきました。



● ふれあいの家みのり

〈10周年のご挨拶〉

日頃より、ふれあいの家みのりに対して、施設ご入居者の方をはじめご家族の方、多くの方々に温かいご支援ご協力を頂き、心から感謝申し上げます。

さて、この度ふれあいの家みのりは、柳島から南湖に移転した平成25年4月1日に開設してから早いもので、令和5年4月1日で10年という節目を迎えることが出来ました。今後も私達に出来る最善なケア、現状のケアに満足するがないように更なるケアの質の向上を目指し、みのりの仲間とこれからも切磋琢磨しながら日々取り組んで参ります。そして茅ヶ崎市南湖地区に必要とされる施設に成長出来るように日々努力致します。最後に皆様のご希望に添えるよう、入居者様一人一人が長い生涯に少しでも幸せを感じて頂け、ゆとりある生活の場を提供出来るように取り組んで参ります。これからも皆様方のご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ致します。

● 元町ケアセンター

元町ケアセンターは茅ヶ崎駅から歩いて5分の立地で在宅サービスの拠点（通所介護・訪問介護・居宅介護支援）です。数年続いた新型コロナ感染対策も緩和され、元町ケアセンターではボランティアの受入れを再開し、当センターに地域の方々が足を踏み入れて下さるようになりました。デイサービスでは皆様と一緒に歌をうたい（マスク着用）、活気も溢れてきています。今年の夏には近隣のお祭りにも参加できて地域全体に賑やかさが戻ってきました。



● 鶴嶺西地区地域包括支援センターみどり

鶴嶺西地区地域包括支援センターみどりでは、8月11日に鶴嶺西地コミュニティーセンターで毎週金曜日に開催されている「金曜サロン」並びに鶴嶺西コミュニティーセンターと共に夏祭りを開催致しました。

当日はミニ縁日や盆踊り大会等開催し、綿菓子や風船すくい・かき氷を提供し、地域のご高齢者、夏休み中のお子さんたち他300名以上のご来場をいただきました。

これからも地域包括支援センターみどりでは、地域に根ざした活動を行い、こどもから高齢者まで安心して住めるまちづくりに貢献していきたいと思います。



● 茅ヶ崎地区地域包括支援センターゆず

茅ヶ崎地区地域包括支援センターゆずでは、地域の方の健康増進と、介護予防の意識を高め、参加者同士の交流のきっかけ作りの場として、毎年、「ゆづクラブ」の開催を行っております。

コロナ禍が明けた試みとして、皆さまからの好評につき、参加枠を30人程度に増し、例年5月～10月の全5回開催から、5月～12月（8月は休み）の全7回開催と致しました。

また、初回5月には、地域の訪問看護ステーション所属理学療法士から、体力測定と評価・運動プログラムの助言を頂き、心身の変化を可視化するプログラムの企画を設定。講師等も地域の各サービス事業所様の協力を頂きながら、ゆづ地区の皆様との交流機会作りを行っております。今後も地域の皆様が楽しめる企画や、お気軽に立ち寄り、様々な相談が行えるセンター運営を目指してまいります。



● 小出地区地域包括支援センターわかば

当センターは、令和5年1月新たに、認知症ケア専門士資格を有する社会福祉士を迎え、充実した4人体制となりました。

認知症地域支援推進員を兼任し、認知症サポーター養成講座の開催やチームオレンジの立ち上げに活動しています。

チームオレンジは、認知症センターが地域ごとにチームを組んで、認知症の人や家族を支援する取り組みです。麗寿会では、認知症ケアに特化した法人として、職員全員が認知症センター養成講座を受講していますが、更にステップアップ講座を受講したセンターと当事者、ご家族がチームオレンジのメンバーという仕組みで、2019年度からはじまった認知症施策です。包括わかばでは、麗寿会の原点であるふれあいの森にもご協力いただき、小出地区のチームオレンジ活動に取り組んでいきます。



● 鎌倉市大船地区地域包括支援センターふれあいの泉

大船まつり

毎年恒例の「大船まつり」はコロナ過において自粛ではありましたが、昨年より再開され、今年も5月に無事開催となりました。10万人近い来場者がみられたことは、地域の皆様がお祭りの再開を心待ちにされていたことも伺えます。当事業所では薬局との連携により健康測定を実施、100名ほどの健康相談に繋げることができました。

大船家族会（仮称）

今年度3回シリーズの「大船家族会(仮称)」は、日々介護に向き合っている介護家族者の為に企画・開催となりました。認知症について、頑張らない介護について、他の家族会について、それぞれ講師を招きミニ講座や意見交換をもって、介護家族者の思いを共感させていただきました。



令和4年度経営状況の報告

法人単位 資金収支計算書

第1号第1様式

法人名：社会福祉法人 麗寿会

(自)令和4年4月1日 (至)令和5年3月31日

(単位：円)

勘定科目	予算(A)	決算(B)	差異(A)-(B)	備考
事業活動による収支				
収入				
介護保険事業収入	1,893,797,000	1,901,882,146	△ 8,085,146	
老人福祉事業収入	78,777,000	84,279,638	△ 5,502,638	
借入金利息補助金収入	0	0	0	
経常経費寄附金収入	30,000	35,000	△ 5,000	
受取利息配当金収入	1,000	4,427	△ 3,427	
その他の収入	8,179,000	11,380,323	△ 3,201,323	
流動資産評価益等による資金増加額	0	0	0	
事業活動収入計(1)	1,980,784,000	1,997,581,534	△ 16,797,534	
支出				
人件費支出	1,301,596,000	1,298,271,939	3,324,061	
事業費支出	281,226,000	285,373,623	△ 4,147,623	
事務費支出	270,054,000	272,223,873	△ 2,169,873	
利用者負担軽減額	550,000	617,236	△ 67,236	
支払利息支出	6,834,000	7,634,151	△ 800,151	
その他の支出	40,000	946,147	△ 906,147	
流動資産評価損等による資金減少額	0	0	0	
事業活動支出計(2)	1,860,300,000	1,865,066,969	△ 4,766,969	
事業活動資金収支差額(3=1-2)	120,484,000	132,514,565	△ 12,030,565	
施設整備等による収支				
収入				
施設整備等補助金収入	9,630,000	11,335,000	△ 1,705,000	
施設整備等寄附金収入	0	0	0	
設備資金借入金収入	0	0	0	
固定資産売却収入	0	900	△ 900	
その他の施設整備等による収入	0	0	0	
施設整備等収入計(4)	9,630,000	11,335,900	△ 1,705,900	
支出				
設備資金借入金元金償還支出	68,358,000	68,358,000	0	
固定資産取得支出	43,506,000	46,848,421	△ 3,342,421	
固定資産除却・廃棄支出	0	0	0	
ファイナンス・リース債務の返済支出	1,357,000	1,520,208	△ 163,208	
その他の施設整備等による支出	0	0	0	
施設整備等支出計(5)	113,221,000	116,726,629	△ 3,505,629	
施設整備等資金収支差額(6=4-5)	△ 103,591,000	△ 105,390,729	1,799,729	
その他の活動による収支				
収入				
長期運営資金借入金元金償還寄附金収入	0	0	0	
長期運営資金借入金収入	0	0	0	
長期貸付金回収収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
積立資産取崩収入	20,563,000	24,091,770	△ 3,528,770	
その他の活動による収入	16,175,000	13,560,000	2,615,000	
その他の活動収入計(7)	36,738,000	37,651,770	△ 913,770	
支出				
長期運営資金借入金元金償還支出	0	0	0	
長期貸付金支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
積立資産支出	26,727,000	24,707,600	2,019,400	
その他の活動による支出	11,415,000	12,063,500	△ 648,500	
その他の活動支出計(8)	38,142,000	36,771,100	1,370,900	
その他の活動資金収支差額(9=7-8)	△ 1,404,000	880,670	△ 2,284,670	
予備費支出(10)	0		0	
当期資金収支差額合計(11=3+6+9-10)	15,489,000	28,004,506	△ 12,515,506	
前期末支払資金残高(12)	0	538,275,023	△ 538,275,023	
当期末支払資金残高(11+12)	15,489,000	566,279,529	△ 550,790,529	

元町ケアセンター

元町ケアセンターでは2022年度から自主事業（地域交流事業）の一環として、地域の方に自由に参加していただける形で、月一回第1日曜日にギター教室（無料）を開催しています。参加者の年齢は50歳代～80歳まで。當時10名から15名の方が参加しております。弦の抑え方、コードの弾き方やリズムを覚え、自分でギターを弾きながら歌えることを目標にレッスンしています。今は毎年秋に開催される「茅ヶ崎地区コミセンまつり」での発表演奏に向けて課題曲を練習しています。

活動の発端は、①職員の特技を地域に活かすことができないか。②ギターを弾きながら好きな歌を歌うことで人生の楽しさを増やしていただこう。③地域住民の方々に手軽に楽器を楽しんでいたく機会を作り交流の場としていく。ということでギターが得意な職員が講師となり開催しております。初年度はギターだけでしたが、「ギターは弦が硬くて抑えられない。ウクレレなら弾けるかも」という意見を取り入れて、ウクレレ教室も同時に開催しております。茅ヶ崎市内の方で興味があれば是非見学に来てください。お待ちしています。

開催日 每月第一日曜日 10時から12時
場 所 元町ケアセンター（茅ヶ崎地区コミュニティセンター1F）
住 所 茅ヶ崎市元町10-33
問い合わせ 担当：木村・松岡 電話 0467-88-7520



▲昨年のコミセン祭り発表会



▲練習風景

編 集 後 記

今年年央より、(予断許されないながら)コロナ禍もようやく終息の方向。施設行事や地域イベントは、徐々にコロナ禍以前に戻りつつあるように感じます。「3年ぶり、4年ぶりに開催…」のポスターは町中でもよく見られました。

コロナ禍期間に失ってしまったこと、一方コロナが教えてくれたこと…さまざまな思いがあります。福祉施設としては、出入りの多かったボランティアさんと疎遠になってしまいました。その復帰に尽力しているものの、一旦途絶えてしまった人との繋がりを元に戻すには時間をしており、また残念ながらリタイアしてしまった方も少なくありません。

我々の施設は、さまざまな地域の方の支えがあるからこそ、事業継続できることを強く自覚しています。引き続き住み慣れた地域の中で、「施設」を越えて、「住まい」に近い環境を提供すること、そして寄り添うケアを大切にして参ります。

法人事務長 鳥羽 芳弘



社会福祉法人麗寿会では、行事やイベント、各施設の取り組み等を『facebook』にて随時公開しております。麗寿会WEBページからのリンク、もしくは本誌QRコードからアクセスできますので、ぜひご覧頂ければと存じます。